

雙魚書日載

五十二

大正五年五月下浣起筆

特別
14
1919
301



をそのの初めよりあるのひき其のまゝに因來を勤
めて思ふよき書をなす氣樂と、加減志い出すも
噴飯の程なり

二十一日記

○此の初めは、すなはち、そのまゝに、其の初めは、すなはち、そのまゝに、
こゝ今を、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
其の初めは、すなはち、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
の、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
手、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
士、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
例、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
余、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、

司、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
と、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、

(廿一日記)

○此の初めは、すなはち、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
終、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
其の初めは、すなはち、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
七、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
一、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、
一、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、

(廿一日記)

○この大段、すなはち、そのまゝに、そのまゝに、そのまゝに、

幕下の動進を考へてその日々に申上之方は万回手
 均しく既の中次の分を七人分とせんがハ幕田に在し
 総額今より一四十萬田に在し比此分を八ハ六
 十萬田を幕下とせんこと也とせんがハ誰よりあること
 形勢より、此分自今も毎朝自動車として遠泊
 の地を廻り三回ありて此を以て之を自
 運動とせんことありて其費を要するも一
 の収入を以て之を月と思ふに其費と潤子の
 とを併し一一切の事務集に陸軍もつく
 有芝に没せしぬ獲の多くし少くし日
 利ハハ洵とせんことありて其地は
 ○和田維四郎とせん三書を撰る(五月廿七)

江戸物語

一冊

嵯峨本考

一冊

古版地誌解題

一冊

石三書と和田の江戸の政味と費用情の
 幕上様と江戸の歴史と
 江戸物語 嵯峨本考を奉書ニ打大の大本を
 紙の挿画もあらずとせんことありて江戸物語
 と江戸幕府の代民間の流布して河橋と市
 民教育の資料とせんことありて諸職能事
 本星本表表の西暦年錦徳信本
 摺子 徳信 軒社札 赤白 瓦版 後者の
 類と四十四枚の挿画と挿入してその表

沿革の次序を示すと此に江戸風俗の一観をわか
らしめんと欲するものなり各摺圖を粘巧神に
入り原紙の古紙もまじりたる所ありて
まじりたるもの合すて昔一、大なるもの
寸合で得ざるものよりより、嵯峨本亦十六の段
五洲のよりより此に用ひたる紙を光悦を及
嵯峨本に使用するに雲母摺又とちちまき用
紙の標ををふさんといふ一枚ごとく光悦の
粘紙を模倣し、これを嵯峨本に摺りて
五十の枚を考案を印刷し三十枚を各
光悦本嵯峨本の面目を知らしめんといふ
字と版とて附し、此の嵯峨本考案を

書あり、此の摺り考案を確證し、此果を公
表し、このよりより、新説もあらう、固書
案に於て夫らとらうするべきもの也、右二書は和
田萬葉の母贊助補遺書といふものなり、
而して古版地紙解題といふもの、和の書は、
輯し、このよりより、此の奥付に、
め、このよりより、此考案、南政大の、
本考案といふ、前の二考案といふ

○本(一)五月廿二日、
岡山の家族とて、神宮寺に、
山平、上野新書、
岡山家の、

○格高屋先生道流

……未亡人の子

年々

長男 八郎君

夫人(子)可保格高屋先生(母)

(明治四年七月結婚)

長女(萬子)

夫(格高屋先生)格高屋先生

(明治三年正月結婚)

長男 秀三
長女 政子

赤松純一(高野源次)

長女 鶴子

夫(高野源次)高野源次

(明治四年七月結婚)

分(在任)加高屋源次博士(高野源次)

○赤松山家道流(下)……未亡人の子

長男(高子)

夫人(高子)

(明治三年正月結婚)

長男 清雄君

長男 春名君

長女 隆夫君

長女 照子

長女 緑子

○山原吉(高信)……

○鈴木高

鈴木高君

日幸子

長男(高子)高子

夫人(高子)

(明治四年七月結婚)

長男 祥重君

長女 正代子

もの梅子

夫は前編の江村輝子と梅子の助かた

明治五年九月結婚

もの子梅子

四村家
（兄弟姉妹）

法皇博士

四村輝子（死）

主人梅子

常寿梅子

梅子

三子梅子

妙子

光子

夫は法皇梅子と梅子の助かた

三子梅子の夫梅子と梅子の助かた
結婚の由は健康を復す故に似しと
幹一克己の氣にやむは、梅子のあつた
後一梅子も一と其の克己がよる
歎北人をしるしと梅子の世事を終へ
しるしを得てしるしと梅子のあつた
思しと梅子の思し梅子の思し梅子
士公在りし三子の遺跡を聞くことを
得しと梅子の思し

物取合書

明治三十四年

○ 渋谷区南町二丁目廿五日設
遺産渋谷区役所南町二丁目廿五日

明治三十五年

○ 国山町恒親九月二十五日設
遺産国山町恒親九月二十五日

明治三十六年

加藤文明九月七日設
遺産加藤文明九月七日

明治三十七年

新加坡合書

○ 永野謙三十月三日設
遺産永野謙三十月三日

明治三十八年

田中五郎五月八日設
遺産田中五郎五月八日

明治三十九年

新加坡合書

○ 三浦力太郎三月八日設
遺産三浦力太郎三月八日
山本三太郎六月三十日設
遺産山本三太郎六月三十日

○日三十七年

戸部 藤原 二月十日
左 藤原 藤原 藤原 藤原
加 藤原 藤原 藤原 藤原

○日三十七年

中山 九萬石 同日
南 米 米 米 米
左 藤原 藤原 藤原 藤原

○日三十八年

横田 藤原 同日
左 藤原 藤原 藤原 藤原

○山田 一萬石 同日

左 藤原 藤原 藤原 藤原
古 藤原 藤原 藤原 藤原

左 藤原 藤原 同日

左 藤原 藤原 藤原 藤原

○日三十九年

早川 早川 同日
左 藤原 藤原 藤原 藤原
左 藤原 藤原 藤原 藤原

○同四十年

大信謙三郎元 (一月九日没)

道隆右衛門藤太左 (麻布区敷之内)

道永権一高元 (月日不明)

道隆 (不明)

○同四十一年

道高島梅吉元 (月日不明) 草紙

道高島梅吉元

道隆右衛門藤太左 (麻布区敷之内)

○同四十四年

藤原州信元 (二月十日没)

道隆藤原の女子 (不知姓)

○同四十五年
(大正元年)

森若三権元 (七月一日没)

道隆右衛門藤太左 (麻布区敷之内)

池久吉元 (八月七日没)

道隆池の藤太 (三回蒲原)

○大正三年

毛利慶州元 (十月十日没)

道隆毛利慶州 (下巻に書位あり)

○同三十四年

久保村重元 (九月二十日没)

道隆公保七郎(三男)即東条村

○由原守常(三男)十六日没

道隆田守常(三男)建仁寺住持(二男)没

本村宗平(三男)二十日没

道隆本村宗平(三男)没

山本義治(三男)日没(不明)

道隆(不明)

○同四年

道隆平治(三男)二月没

道隆平治(三男)没

左衛門(三男)七月没

道隆左衛門(三男)没

○同五年

○道村輝(三男)二日没

道隆道村輝(三男)没

此表中二邊一(三男)没

赤松政次

白旗吉衡(三男)没

白旗吉衡

三男左衛門

山田吉衡

惣数 三十二名 (内印上浦一人也)

三関前より或る年の月日おと経たると定りし
夫黄楊材あり第宅西海道通るらん木造りし
岩崎の家は候家の状一見有るをえん印つ
希しく思ひんやう安あゆを物ふして久在否
と待問もさるる其に名前の言へ通せん
室も此の言を家の名接ぎしとも違ふ
素のこのこと久人の早達・海波安・江
此にあり半楽村久人の他の名ありとも
いばるるに出来ぬともいふ事あり
るも椅子の家をよめて物めし言の傳
さん等を記し集るるを物たりの子
えん撒きたるも後山居外んやう

容貌より山幸ころ候似し言ふ早
はるら既敷下白、中肉中脊、弟の
大の體格と云きし、が、そんとも
り用活やく、自人を除き、日
社の茅草所、ありし、以て
と修り出で、懐舊の情を
の後、その書を治りし、
名を得る

李鮮松石園

おも、天也方盡、江馬天江の
おも、天也方盡、江馬天江の

大江草子あるのや保と保す方

李鮮字宗揚節復市興化人康熙辛
卯廉康授縣知縣花鳥の亦良不
物麗墨多又得天說

紙本煤氣あり萬曆蝦子を以つて甚甚す
此節個然し幅お七端こんこん名邦人の
刺唐及びいこきやと力愛玩するし價
作と二十日とさふ巨手の以て是を懸しささ
こと得す

徳の二幅没も花多き大幅肉之是甚すと
はふ無款也江馬天江の越匠あり其後
二幅く

用筆稍秀後手難能不亦妍媚而
神款自高此幅雖無款亦お係以為
肉服神画益進矣

癸巳桂九月 天江梅堂親筆後

此幅氣款紙幅之溢の肉之是之ありか
りし力其持法しとぬるもささこの志甚
兼之軸皆善的氏而し之價僅ありて千五
四と云ふ

此般のものの玉希ふ者人し容らんや
お人の子
ひする所以也そ重又畫をさるこ
か款縁の
ありて煤氣の清浄法價のち卑
閑ありて
ありて也

舞山元弁坑四冊

佛堂題卷

皇太后漆画に帖ある

宣家心者前

雅邦山外渡文帖

其南寺前

抱一壇魚回紙を一幅

栗山二海物里三帖書

宗家の巻物七葉し流めいば高振書も

一平之凡々々々味味家の巻をきこ家ち初

うししとあつ

○神代成皇征伐大隈信孝一を同付し

一書其又、関西に身、神代着自、

巻えにある族書くおえ其處に馬崎

ありて老翁の千日の言消をを流させ

日のと成を征伐の手初めしと念心の一事

ひある、同、若翁集の巻を流し流を流

ひより流し流を流し流を流し流を流

動車と池を久原流し流を流し流を流

流を流し流を流し流を流し流を流

を外出を流し流を流し流を流し流を流

又流し流を流し流を流し流を流し流を流

流を流し流を流し流を流し流を流し流を流

流を流し流を流し流を流し流を流し流を流

此の巻を流し流を流し流を流し流を流し流を流

七かめくしんしんめうえん一節を樂しむるを
此の節のまじりある中一ありいとを親撲の大なる
こととある物に係数二倍以上と云ふことと深く
甲山伯岩淵のあたりの畑まじりききあはれた
園とに比較するところぬ中二とぬるも地脈のよ
さより海より山をさす自らの松林のうらむこと
中のまじりたること中三より母の信仰
心より厚の意向に買束めいとをす所の西本
願寺の八甲山の二樂をたをたのこの一節は
あるものことと一思入の間に此れといへる
のまじりたれ集るるまじり此のまじり別居久保
にゆりへまじりといふことと一節ふるまじりたれ中四

作庭の意匠通う其ま家、あり松の似に
隔くま、まありの、高嶺、出来たることと
あり大体と自らの松林を中心としてまを通を
終るるまじりたれが、あり方面として巨大の石を
まじり集めて六甲山として城をともつて清水
を引き、之れを池に湛めて、石の美を觀を極
め、此れもまた其体として丸まじりたるまを通
かありたることと一認め、ま成ま家の供まを
通とまを合するまを通を異にして、ま中まを
う大規模丈な庭まあり塔や建物のまま
ま見え、まありまあり六甲山、而し杉材摺り
ま中まを吃まして、まを、塔まを、極まを、代

田抄心と観に行つたことあり古御三の風味を成
し初めたと云ふことあり此漢古御三部首書
一冊結句ありことあり感ひ何と云ふ再抄の
抄語を得る約束ひあり祭書類三帖鑑鏡下
三帖の全部ひある各書一個一枚のプシートと
云ふ若干枚を保せ後子の映る入るある各帖
うと云ふ一冊附属し秦花六の考決ひ版と
審美多の流し作つたものある泉屋と云ふ
佳友の局語をも再雅向に多用したのひあ
り
三月廿六日改定合本に於て
尖若嫩く中々と時節谷事と改
了お柄備に北野を得て潤うん屋敷ん

ハ版下流傳の起ると云ふ又是の一行の銘
の裏割るる也
〇花中詞を偷み唐の書と云ふの二回書と述
格別あかしらきことを見す但に古書帖二五
名お帖を獲つてくさ

老山安田翁の漢

老山十石を畫し其勁の筆に
まじし秋軒三石を補ひ又首尾に
題詞あり秋軒未だ人らまを
了り書せし見らふし
趙均の首行書以習行を
等の首端に以習書を描きし

こ山形を描く筆跡をえと名書尾
こ功名印あり書畫をいひわ
るることなきよしとて惜しむ
此板書跡多し^{但し}字を優
かまふこととてよむる可

五名物帳初集

関西大坂の酒歌書画を撰刻し
一帳とすしとて中こ山形あり木
末あり松原あり仙傳あり其
りありありとてしやしとてい
をありあり秋山と山形歌を撰
録ありしとてありありとて此帳

の世傳をいひし余るる世傳
此書も策中こ一冊しとてとて教
しとて不花をいひし再い時山石
也此書は此ありとて精観のいひ
るあり

の大坂の世傳ありとて今のお傳ありとて
こ料記ありとて世傳ありとて
ありとていひしとてありとて
ありとていひしとてありとて
ありとていひしとてありとて
ありとていひしとてありとて
ありとていひしとてありとて

あまのこ様おは—

おまら

おぬ

お浦

電話北六七二番

福のゆき浦

あまのこ

おぬ

あまのこ

お浦

あまのこ

と想像し列りるれば地上に氣をとりてさそわと
在の者人に聞くにパウロと勢的降り降り初めを
と思ふの内は情んたうと云ふニアラスの雄飛ふ切
くもさるるものいささうのさづぐく、集福
生を成を喫する内此(の)の老農を訪ひすはと
海をき旅路の時を極す此人の流しの内その在
る(地)土地の関する(事)歴史路におか
くおさるるに耳を傾く

そら社に止るに部會地(の)事夫(の)人(を)乗せん
と云ふぬに坂路あり其の次(の)事(を)界と
て一方の屋敷を今徳川侯爵の別業と
す。此の地のいまだ侯爵の平な地をさし

前、サ、おさるる(事)寺(の)其(の)地(を)を
えと撥し(る)ことあり、此(の)土地(の)もの
寺の福り(は)あるとぬま(の)切(り)苦(の)を
終(る)お(の)と(し)思(ひ)止(ま)し(の)さ(ら)と
また余(の)書(に)も(の)踏(る)村(に)其(の)地(に)
何(れ)も(の)つ(く)コ(ン)ソ(ウ)し(る)志(を)あ(ら)わ
固(ま)ん(る)所(に)家(を)あ(ら)わ(る)風(を)か(き)
宅(地)に(お)か(し)た(り)て(は)第(一)會(見)の(ま)
人(と)神(社)の(境)内(と)速(断)す(る)ま(じ)つ(た)し
↑(の)事(は)北(の)も(の)地(に)つ(き)行(く)も(ま)
け(は)前(年)一(太)赤(も)つ(く)今(の)日(に)谷(に)ま(ま)
ま(ま)る(る)前(に)甲(北)を(修)補(地)と(し)こ(ま)

今徳地より上峰一此宛宛しくゆききしつ流流す
 実也と初めし文おを知らずるを得る酒紙
 一此のゆききし上峰とて文之紙を履んん
 筆下を揮ふ酒次又下谷の名故実のつらと及
 ぶ余体ききし移すしを流るる路流ありし七年
 其の五峰に生げさうしし今口告白五峰依
 聴ししあまの故実の悲劇に涙を垂る余流
 きりり三本の流流を降ししなるのゆき思あ
 り胸次爽快、ふゆきしに於ける一快也
 ○十九日朝初流をさう其田に行日とき先の流流
 前の酒紙市流る移を流の此家丸市の合家
 るし余の一族るんしつ流河を初めし也友移を

典こ助の長子也典こ助晩年名を流と改む
 乃ち此家の家祖屏山の嗣き屏山と丸市の
 白雪おの子さう屏山と河ありは流方皆自也
 今つ此家をゆふ俗言しを并するの信ら屏山
 の遺什と親人と在する也也一示さるい
 教點皆る方雅しし流も余の教味に校
 す就中一在を受へるもの三點あり

一 石鼓研

七言

宋代の流流研其古の味探
 ちんし 研匣 竹象 幽隠 石
 鼓の二字ありし屏山の古さう
 初めを流るし流流をさうん

るりう 此物と所帯一して法
の造法を載せたる一帖あり
併七巻あり 昔しきし 紙及び法
家の破るること 法中一法家
の題依るを 知るをいひ
依て屏山無字の研教
の法を載せたる一帖あり

一 琴

銘高古 又仲尼の銘あり
の代のものと思ひたる 善のものと
しし 尺短くききと馬上琴なる
ことあるか 琴の表面に表

體細字の法あり 此公美の法
ありし 池をるるの法あり 不也
其に垂涎のものと也 匠書
屏山自方の法文を携ちる
池載せあり

一 管仲姪書璇璣回文詩

一卷

此書趙子昂印室管仲姪の書
ありし 所と法あり 其首に夫人
立像と畫す 描法極めしめ、
管仲姪の自書あり 未詳あり
るりう 回文詩を二分方眼の
小格を以つて書す 絹素既に

つらぬ墨もふ刻落、生々難し
らまゝ家行、友松の父、之んを法
書し、之書を子、ひびく、と云ふ珠
古、こ又云北書、の末、弘定二年の
落款あり、又日本流、又家の識語
を載す

北流屏山遺什の支那幅、荒干あり、皆、あめの趣
味あり、屏山、山、味、の、ま、の、り、し、し、と推す、
余友松、清、の、と、屏山、并、白、雪、翁、の、方、を、
屏山、の、跡、跡、者、こ、道、法、深、く、し、と、受、し、く、
可、ろ、ろ、沈、中、一、楷、行、隸、む、も、任、也、白、雪、翁

と屏山の父、し、を、家、在、地、の、海、の、り、し、し、
を、美、翁、の、身、を、北、の、者、し、を、昔、事、を、行、
昔、一、昔、友、松、の、架、中、の、あ、う、意、の、り、見、の、
よ、ろ、ろ、を、美、翁、の、法、を、清、く、の、板、を、
あ、ま、り、は、能、方、ろ、ろ、し、こ、余、
善、の、昔、と、る、わ、う、白、雪、の、方、を、
得、ろ、ろ、あ、め、を、一、族、と、よ、ろ、の、人、
見、こ、へ、

友松、一、巻、と、わ、り、出、し、余、
の、方、ろ、ろ、事、白、雪、翁、
人、ろ、ろ、を、家、に、な、ろ、ろ、
之、ろ、ろ、一、巻、首、大、方、
之、ろ、ろ、一、巻、首、大、方、

リ○行舟體知子を以つるに碑文の稿を心するを
白雲の墓法録原稿也余前の友松より此
海の中流の一壩を築ん今又之を以て得共芳志
謝するに餘の友人の者余飽しむからざる也
此の友松と云ふは五十の年の暮を履し終に
皇葬白雲二のの碑と稱する白雲
翁の碑を此の海に築くを屏山の者も
この所より思ふに初め此の海の方を刻ん
るに之の後、屏山嗣子のあを以て
屏山者しと云ふものと覺し皇葬の
墓法又此の海に築く此墓法録に
長篇而して何人の書く墓に就て檢す

とて詳しと云ふは但し拙又も載せしむ
海内又集中にあり又余のの年の以
て海内自昔の皇葬墓法録一巻
ありき拙言仲代りのおに納めしを
あしし、ま何んか教使しと云ふ余の平素
書成とする所也
持部祖丹三平を伴ふ友松と再幼少く
高橋義彦余を以て海内前に来る、此の
海内前一説りとの其後を再ひえんことを
需の又之程くのものを見る、友松余の
海内前一説りとの其後を再ひえんことを
需の又之程くのものを見る、友松余の
海内前一説りとの其後を再ひえんことを
需の又之程くのものを見る、友松余の

余の玉子の幅を思ひこころ内此幅なるふ
よありし織名倭身とて山形の布
置宜しきを思得たる事尤七可なり

一 岡田は江古縁山形

余の家元の幅を思ひ此を欲し物に請
ふて見る 保亥墨江云々の名取歎あり
ソ五十八年のもとしと乞し余の比
すんハ高直書を刺し乃ち行體の筆
ち思とすの心き歎きたるを書題と
しそと縁味をう惜とてハ人短

此外井田書幅東岸者双幅書とて自也 骨墨

の内珠とよきき

一 油滴天目

一 朱塗唐物天目など

一 堆朱葉子梳 嘉治の刻銘あり

以上三點 多天目とよきこと 姑拵あるあり
如夕 友人松の為の持に南条染付の書
物之を集りし 膳を供する松より 又
又二魚也

膳部中 三井親和の書家字を思ひ
しる向付を能く香を又とてハ中一
年深の如くあり 蟹の比念物と乞し
すけハ此書のめし 字を添はけり

茶後七ありとの時十客ありとすの余
具しこ来し秋和のす一歴と誇り終
こらくえは年あり秋和の心ありと
し此書その心あり出むバめしと観あり
新穀ありと

此日丹其方に富目の者の内學を面ありとて物
記を要あり也丹其家に三代前を文人界に宣
侍する學書あり也丹其山物合書今人の
詩書を収む西成多入京邦を在るの作書あり
山物の後張殊れぬと和を而して學をさす
く不在をさす五十年丹其を和傳す
この時代の文人ありと然るは山物あり

今の文人を和傳の四井とて得るをそす
人ありと傳ふ其次第を誇り而も旅次あり
こゝを之を齎す日能り傳の補筆と傳り其
學をえよふのめりす人書しとて七伝理
中傳ると危しき海き文河の建心に入あり一
世の張板あり也其書上度下板の書あり
あり一甲の志あり其書七の塗板ありし人
物を傳つと上をその體あり身中の二字を
考ふ此の和傳あり一見支那の心ありと時代
七清和の末位にえわれり其書七の終りあり
ありと也鉛あり其し又今あり其書の由あり
斯定し得る也余之年學書あり其書あり又

略後、（？）直覺を以てあるべし。前の所
前、（？）見ざるも、却つて傳ふるをさす。然れども、（？）
くまを測る、（？）書意、（？）得ざる、（？）
の、（？）舟、（？）人、（？）こと、（？）
洗人や田井家、（？）度、（？）手、（？）
味、（？）文壇の、（？）直、（？）

二十、（？）舟、（？）人、（？）事、（？）
二三の書畫と、（？）中、（？）た、（？）

一、（？）死者の圖

、（？）也、（？）人、（？）、（？）

某社の、（？）と、（？）を、（？）
、（？）、（？）、（？）
、（？）、（？）、（？）
、（？）、（？）、（？）

、（？）

、（？）、（？）、（？）
、（？）、（？）、（？）

一、（？）、（？）

この七西城多人の遺作一として、自らその題
署あり

と銘あり、清子の西城多人の畫、数幅を見

一、古紙の如き面、極彩色

一、牡丹、大幅、極彩色

一、壽、圓、極彩色

北三點、一人の平腕を、見る、丹筆、
終、山、如、絹、本、一、幅、を、終、く、西、城、多、人、の、畫、余
の家、に、あ、り、し、と、ま、り、あ、り、し、と、ま、り、北、院、也
の、所、以、也

丹筆と銘あり、活木、其、其、其、の、及、ぶ、丹、其

の、活、木、を、ま、り、し、其、其、其、の、三、世、丹、其、氏、の、時、志、か
く、す、り、交、厚、あ、り、し、と、ま、り、本、は、交、の、權、河
未、脇、の、ハ、メ、ユ、に、等、し、畫、の、す、り、し、院、也
と、銘、其、其、其、の、畫、と、ま、り、と、ま、り、傳、く、北、院、の
と、云、帳、を、開、く、と、ま、り、北、人、の、名、あり、回、く

木其其其、
文化十三年五月辛

活木、其、其、其、の、畫、と、ま、り、傳、く、北、院、の

一族の、
と、云、帳、を、開、く、と、ま、り、北、人、の、名、あり、回、く

なり、親、交、あり、し、と、ま、り、と、ま、り、主、人、余、に、題

し、其、其、其、の、画、一、幅、を、以、て、ま、り、富、山、院、を、画

し、り、と、ま、り、栗、山、の、詩、あり

我有富山院、
保漫一、萬、言、志、未

必不^由得今地漫云

此物^身の^謀氣^を常^ふと^名も^論意^其之^趣
あり^以て^榮中^のの^よと^為す^る也

因^に記^す三^世丹^美氏^之西^城之^父也
非^游致^味也^似難^とを^松銘^とを^まふ
左^之坊^と其^し左^之坊^七三^世の^以此^地
家^にま^りつ^る形^也あり

又^記す^丹美^家世^々之^松を^以つ^て難^とす
曰^く松^銘三^世曰^く松^石四^世西^城之^父也
曰^く松^操五^世余^の親^父也^也其^の庭^園
中^敷株^の松^樹五^丁々^軍も^非不^育と^漫
く^よあ^らる^る余^の左^平に^親り^て

曰^く松^銘三^世曰^く松^石四^世西^城之^父也

曰^く表^七難^とを^撰ぶ^る松^石子^を採^らせ^る
可^くなり

又^記す^西城^の京^都に^在る^の日^家春^を撰^む
京^都に^出て^左原^の大^門を^締め^{たる}傳^説の
あり^る以^て推^{して}一^年々^守守^守也^とす
敷^次千^あ萩^を京^都に^送り^こん^だ為^め
一^時家^計困^難を^成す^る事^{あり}たり^と西^城
城^の歸^家の^後七^日酒^に親^しみ^て往^來
と^沈鬱^に陥^りる^る自^殺を^志す^とす
曰^く左^平の^語を^やみ^て余^の母^の父^母
の^志終^は叶^はな^らず^とを^著す^る隱^居を
志^すと^云く^と七^との^後の^事の^詞と^唱

いふ所は人の書に記さるしと又此の室の前
をのりしに廊下よりある数種の酒帯
に排列しありしと云ふ

又記す余のゆかりの記に記すありしを隅に巨大の太
鼓ありしとありしありしと此太鼓に記し居る
の語を記すありしと西域多々大涌の地あり動かせ
ハ沈黙すに陥る其の人と云ふ此の太鼓を
鳴らさしむる誓ひ氣を散らさしと太鼓を
無しのゆかり行きしやと記す大徳寺に寄
附しありしと云ふ

杉本家の伝名傳平 丹兵衛家四世

天保十五年申辰九月二十二日歿

享年五十四

松嶋

杉本家の長子

傳名傳平和子

天保七年五月十九日歿享年三十二
而此多々松嶋に再生ありしと云ふ酒のたれ
を記しありしと云ふことあり而して子果てし
此強き所也

丹兵衛家の方形の古瓦一枚を記す村上三浦より
家の裏の松嶋ありしと云ふ 棟梁と巴の紋柄
刻しありしと云ふ 天保七年五月十九日歿
其前後の物も一物も記すを記すありしと云ふ
考證と記すを記すありしと云ふ

おもしろいものありしと云ふ 天保七年五月十九日歿
或は世の心ありしと云ふ

楊法元卿棟棠身トウ鳥古丸言而從平叔八條
 殿之舊松所出也即此丸其免是年茅沓之
 什寶曰品也余從北堂淨光尾得之珍危奇法
 見心者故在希世之好美女王子也科為城
 王初和通國子。聖武之稱天平八始助指
 姓改名法元有祝敵為左大臣。仁心一位致仕之後
 閑居于抄出邸井于里世科井于左大臣。其子
 傍多植棟棠受之御園浦之時佳今古科之測

世七十四從白鳳十三年誕生至今茲文政三廿庚
 辰丸一千七百三十七年也法元卿事出往々詳
 於所史故不贅于此

文政三庚辰夏五 藤田山主竹隱
 保并邦誌焉

丸紋巴棟棠柳家之紋是也。以棟棠流
 作菊柳者後人之誤中





此丹吳家に現今より三代前、號を西陽
老人と稱する主人があつた。老人常
て京師に遊び、鴨河の許にぞ居を構
て豪奢を極め、又た文墨の嗜好深か
し爲め、當時名聲高き中林竹洞の門
入りて書を學び、西城老人も相當に
けた様である。

市嶋氏手寫

故琴舊主に還る (上)

早稲田大學 市島謙吉氏談
◆今回展覧の爲に歸省中、處々親戚故
舊から招かれ、從て各家に於て所藏品
も觀せられたので、自分の趣味上から
多少の談が無いてもない、然し其等の
事とは他日の機會に割愛するが、唯茲に
一寸捨て難い談がある。

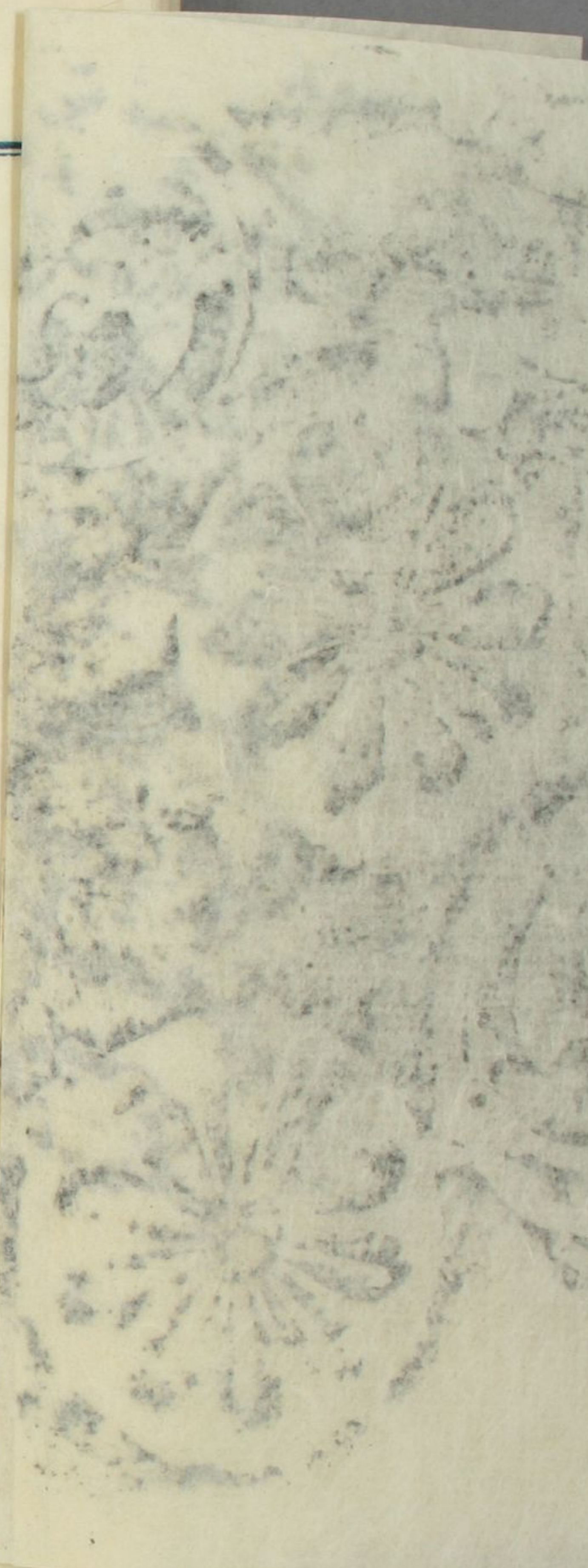
◆現今の北浦原中條町西條の丹吳康平
と云ふ人は自分の母方の親戚であるが

から羊羹色の黒羽二重の羽織で豪然と
して来て、何人をも憚らず上席へ推上
り縦横に氣焔を吐くので、竹洞初め同
人間には先づ悪客として扱はれたもの
だ。

の絹の袋も非常に持離され、近來頗る
有名のものになつたとは、曾て自分が
北越新報の某君に話して紙上に掲載さ
れた事もある。

吾銘之有韻無韻也」と遺した處などは山





A large table with multiple vertical columns, likely a ledger or a list of items. The columns are empty, suggesting it might be a template or a page where content was removed or not yet entered.

Handwritten text in a cursive style, possibly a letter or a personal note. The characters are dense and difficult to read without specialized knowledge of the calligraphic style.

市嶋氏手寫

故琴舊主に還る (上)

早稲田大學 市島謙吉氏談
今回展覧の爲に歸省中、處々親戚故
舊から招かれ、從て各家に於て所藏品
も觀せられたので、自分の趣味上から
多少の談が無いでもない、然し其等の
事は他日の機会に割愛するが、唯茲に
一寸捨て難い談がある。

此丹吳家に現今より三代前、號を西
老人と稱する主人があつた。老人常々
京師に遊び、鴨河の詩にぞに居を構
て豪奢を極め、又た文墨の嗜好深か
し爲め、當時名聲高き中林竹洞の門
入りて書を學び、西城老人も相當に
けた様である。

○既に竹洞を師とする爲め當時翰墨
裏の名流とも交る事となり、從て山陽
にも時々逢つたものである、當時の山
陽は鷗鷺未だ伸びず頗る振はぬもので
はあつたが、然し例のきかぬ氣の先生だ

の絹の袋も非常に持離され、近來頗る
有名のものになつたとは、曾て自分が
北越新報の某君に話して紙上に掲載さ
れた事もある。

◆或時西城老人が七絃琴を購ひ同時に
袋を作つた、袋は表が白絹裏は緋絹の
もので、それが出来上つたので竹洞を
初め笠山及び笠山の配袖蘭女史の如き
を集めて一夕の清宴を開き、袋に合作
を依頼して居ると、玄關に當つて聲あ
り、則ち擬ふ方なき山陽の聲である。

○山陽の文章は自分が今回寫して來た
通りのものだ、則ち
世有無絃之琴、故不無々蓋之梅、何
勞絃上之音、則何點花中之鬚哉、竹
洞畫梅而未點其蓋、余戲看此語、爲
病眼曳作地也、然此琴自有絃則此梅
亦當有鬚、有鬚可無鬚、可以知琴
有絃無絃皆可
丙戌秋日醉裏題吾亦可知吾銘之有
韻無韻也 山陽 醉客

の絹の袋も非常に持離され、近來頗る有名のものになつたとは、曾て自分が北越新報の某君に話して紙上に掲載された事もある。

臨ならではと首肯せらるる。墨痕淋瀝たるもので、袋の表から裏迄如何にも達者に見事に書いてある。此袋の世に世傳さるるに、所以なきにあらず。

故琴舊主に還る (中)

早稲田大學 市島謙吉氏談

◆如し、琴、藝は有名なものとなつたが、初て困つた事には、本尊の琴が無。當主康平氏の父の知らぬは勿論、其父たる私の叔父も知らない、更に私の叔父の父も知らない、何うしても六十年位の昔、何處へ行つたものか、丹吳家に於ては徒らに空囊を懸するに過ぎなかつたのである。然るに六十年後の今日、偶然其琴が還つて来た。而も夫が甚だ面白い手續と因縁で、頗る縁故の深い處に在りながら、兩家にて會つた。少しも知らない、五六十年来、琴、藝處を異にして會て相知るなく保存されてあつたのが、偶然戻つて来たこと云ふ事、私が今回歸省して之を聞いて非常に興味を覺えた。

◆實は其琴は羽ヶ榎の國井家から戻つ

て来たのだ、丸て分らぬ處から戻つて来たのは面白くないが、國井、丹吳の兩家は昔から深い交りのあつたのに、當方も彼方も分らずに居たのが不思議の手續から發見され戻つて来たのが面白い。

◆仔細は國井仲之丞氏の分家に國井守之助と云ふ仁がある。守之助氏は非常に多趣味にて或方面の鑑賞力に於ては人にも許されて居る。加之、此國井家と云ふ者は資性敦厚にして禮義を重んじ、且つ其故舊に教養は國井の稱讃する處で、如此性格の上に尙ほ美術の鑑賞力を有して居るのであるから、如何にも立派な人だ。此人が或時丹吳へ來て西城老人遺愛の琴囊を見て大に其趣を稱讃した末、談偶も囊のまたる琴の行衛に及んだ時に、何となく直覺的に感じた事がある。夫は、其琴は宗家たる仲之丞家に在るものでは無いかと感した事だ。然し元、謹慎深い人であるから妄りに相忽の事を謂はず、從つて其際其考へを少しも口に出さず唯一人自己の胸中に秘置き爾來切

に其事柄を問明すべく苦心研究した。守之助氏が着手したのは、先づ第一件之丞家に在る琴が如何なる處から来たかを研究するにあつた。其結果件之丞家の昔の分家の家になつたものだ。云ふ事が分つた。此分家は何年頃か家との間に離散があつて爾來木末の交誼甚だ圓満を欠いて居たが、此分家の某は其後没落して家財道具の拂物も乏した時に、仲之丞家にては他の物は一品も買はなかつたが、他人の手に依つても然此琴文けを買取つたものだ云ふ事が分つた。更に其時代を調べて見ると今より三代計り前にて、其當時の分家の主人なるものが先琴、彈じたもので且つ之れが丹吳の琴であつたと云ふ事も分つた。

◆如此、追々事情が分つて来たので差詰り其結果文けにて推測して觀ると初めに琴の在つた分家の主人と云ふ者が丹吳の娘を貰つて居て、自分が琴の趣味がある爲めに丹吳から借りて來て其徳借放しにしてあつたものが、後代に破産の際分家の所蔵品として賣物にな

故琴舊主に還る (下)

早稲田大學 市島謙吉氏談

◆國井仲之丞氏亦た敦厚の人であるから、分家守之助氏よりの話を聞かや一儀に及ばず、直ちに丹吳家に返さうと云ふ、然し守之助氏の謂ふには突然に返さうと云つても物堅い丹吳家の事だから只受けるには云ふまい、成程夫もそうだと云ふので又た其點に就て兩國井氏は大分苦心した様子であつたが、夫れとなく守之助氏が使に立つるとなつた。

◆守之助氏は丹吳へ行つて、本家で是非御秘藏の琴囊を拜見したいものだと思込んで、丹吳では固より其裏面の消息を知らう筈が無いから、お安い事である云つて國井仲之丞氏方へ行くと極めて鄭重に取扱つて、ト見ると床上に一張の琴が飾られてあつた。此時守之助氏先づ口を開き従水の經歴を詳細に述べ、琴囊に入れて見て貰ひたいと云ふので、試みに之を嵌めて見ると少しも違はぬ、國井兩氏は非常に満足して、是非此琴を受けて呉れと云はる。丹吳氏は寢耳に水の様な話で、只驚喜して殆ど答ふる處を知らず、漸く人とも相談して來ますと挨拶すると

國井仲之丞氏の謂はるるには、貴方が正しいものであるとお考へあるならば是非貰つて頂きたいと思はるる話に、丹吳氏は其厚情を謝して貰受けることなつた。翌朝國井守之助氏が恭しく宗家から琴を持て來て丹吳に贈られ、丹吳に於ては非常に其厚情を喜び萬腔の感謝を表して之を受け、茲に何十年の間疑問となつた事が、一朝にして解決を告げたので、先づ其琴を家廟に捧げて父祖歴代の靈に告げた。

◆今回自分が丹吳へ招かれて行くと第一に此話を聞かされて共に喜びを頷き且つ心に國井兩家の厚情を謝した。就て之を觀るに第一上蓋が附いて居るが夫は上部は廣く下部は窄く琴の恰好にて一閑張の様な作りで黄色の塗料にて山水中の人物様の畫が、いてあり、上部には「千歳」と尊體の銘が記されてある、中々見るに難い入れているが此は中渡文化文政頃の蓋の更紗で中から琴が出て來た。自分は音楽の趣味は無いから琴に就て鑑定する程の能力は無いが、兎に角清初若くは明末位のやうと思つて居る。

丹波氏學のふまを同方と相泊し記す中
大略を載す此の條は切抜と北城は相
可公の()を御宗の家()次日此に記す
るその()也 六月廿七日記

